

# 梅棹忠夫の著作物と著作目録

三原 喜久子（国立民族学博物館・梅棹資料室）

---

## 梅棹資料室の資料

本日は、「梅棹忠夫の著作物と著作目録」についてご報告いたします。「基盤機関からの活動報告」ではなく、基盤機関に移管するまえの個人資料について、長年、取りくんできた経緯と方法についておはなしさせていただきます。

梅棹資料室については、2006年4月に総合研究大学院大学葉山キャンパスで開催されたワークショップで、かんたんに紹介をさせていただきました<sup>1</sup>。

その年の7月24日の『日本経済新聞』（夕刊）に梅棹資料についてのインタビュー記事が掲載されました。「梅棹アーカイブズ 存続危うく」とか「文化資源？それとも私物？」といった見出しになっておりますが、取材をうけた同年6月以降に急な展開がありまして、記事が掲載されたときには、「梅棹アーカイブズは、国立民族学博物館（民博）のほうですべて受けとる」と方針が確認されていました。

一個人が所有している資料が、共同利用機関の歴史資料とどのような関係があるのかともうしますと、梅棹は、民博の創設以前から、その母体学会であります日本民族学会で博物館問題担当理事をしておりました。そして1973年に創設準備室が文部省内におかれたときには準

---

<sup>1</sup>三原喜久子「梅棹資料室の活動」『共同利用期間の歴史とアーカイブズ2005』pp.109-118 2007年3月 総合研究大学院大学葉山高等研究センター

## 第 I 部 本研究課題の成果報告

備室長を、1974年の創設後は博物館長を19年間つとめ、退官後は顧問をしております。したがって、民博創設以前からの関連資料はほとんど持っております。それだけでなく、幅ひろい活動をしておりましたので、自分がかかわったすべての事業の書類もそうとうあります。それらは1件ごとにオープン・ファイルにに入れて、五十音順にならべて保管しております。1993年の退官時に、館長室と館長研究室にありました資料を梅棹資料室に移動いたしました。

梅棹資料室で管理している資料は、梅棹の全著作物の現物 / 梅棹の著作物、講演などから、印刷物に「引用・紹介・批評・言及」されたもの / たずさわった仕事の関連書類や手紙などのファイル / 図書・雑誌 / 写真 / フィールド・ノート、スケッチ / 直筆原稿などですが、いずれ「梅棹忠夫アーカイブズ」という名で、民博に「民族学研究アーカイブズ資料」として寄託されることになっています。

図書資料は、以前から、購入したり、著者や出版社からいただいたものを民博に寄贈しつつけており、はやくから図書室で「梅棹文庫」として確立していて、現在の時点で合計約35,000冊はっております。写真資料は、いちばん古いもので、1955年のカラコラム・ヒンズークシ学術探検で撮影したもの、そして、その後、民族学者として撮りつけた約34,000コマを民博がデジタル化し、移管するための取り決め内容の検討にはっております。それより古いフィールド・ワークでは、1944から46年にモンゴルにおりましたときは、フィルム不足で個人の写真撮影はできず、もっぱらスケッチをしていました。スケッチはモンゴルだけで百数十枚あり、それはそのまま資料室に保管しております。

フィールド・ノートは、戦前のものとして1941年のボナベ島、1942年の大興安嶺、1944年～46年のモンゴル、戦後は、1955年のカラコラム・ヒンズークシ、1957～58年の東南アジア、1961年の東パキスタンやネパール、1963～64年のアフリカなど、130冊ほどあります。

いずれも、資料室からの持ちだしや貸しだしは、原則的にしておりません。見たいという希望に対しては、その目的などをうかがって、資料室で見えていただいております。

## 著作物の整理と「著作目録」

本日は、その梅棹資料のなかでも、この1~2年のあいだに大きく整理作業がすすんだ、著作物の目録づくりについて、おはなしさせていただきます。

梅棹は、わかいころから本人がたいへん意識して、自分が執筆した物、対談や座談会が掲載されている現物を集めて、年代順にならべておりました。はじめは自宅の書庫に、民博ができてからは館長研究室に、館長退任後は梅棹資料室に移動して、現在にいたっております。

梅棹資料室は、長方形の部屋で、その長辺10メートルの壁面いっぱい、天井まで木製の書棚を置いて現物をならべております（写真）。著作物の現物は、かさのあるものはそのまま、新聞は切りぬいてA4サイズのクラフト紙にはり、うすいパンフレットなども同様にして、それを、おなじくA4の二つ折りフォルダーに糊づけしました。整理には大きさを一定にする、すなわちサイズの規格化をしなければなりません、いちばん使い勝手がよいA4判を使用しております。

梅棹の著作の現物の分量は、A4フォルダーが縦に立つ高さ・奥行で、幅90センチメートルある棚、約60個分をしめています。その棚に、著作物の現物は発行年月日順に配架されています。1995年の阪神・淡路大震災のときには、それらがみごとに書架から飛びだし、床に散乱しましたが、根気づよく棚に並べなおしました。そして、もとどおりにしたのちも、つぎつぎと、あたらしい業績をつくっては棚に追加しております。

その書誌のデータベースを作成し、目録として冊子にするという事業が、まもなく日の目をみようとしております。いま手がけております「梅棹忠夫著作目録」は、正確に言えば「梅棹忠夫著作目録（増補・改訂版）」です。

もとの「著作目録」の作成は、50歳の誕生日をむかえるすこしまえ、1970年2月に思いついたそうです。当初は原稿完成時につくっていた目録カードを、印刷物として現物を手にしたときに記録をつくるようにして、B6カードに著者名、題名、掲載誌名、号数、発行年月日、発行所、所載ページなどを記入していました。自分の「著作集」の編集を

## 第 I 部 本研究課題の成果報告



梅棹資料室の著作現物棚

視野にいれ、現物をそろえ、書誌カードをつくるという作業をもとに、そして「著作集」の編集担当者の協力で、1979年の6月、思い切ってから9年がかりで『著作目録』は完成しました<sup>2</sup>。

このときの『著作目録』を還暦版と称しております。ここにおさめられているデータの件数は1940年から1978年までに発行されたもの、約2,200。目録は冊子の形態をとっており、A5判、横2段組、目録部分の最終ノンブルは228となっています。

---

<sup>2</sup>梅棹忠夫（編）『梅棹忠夫著作目録』1979年6月 中央公論社

## 著作物の単位

ここでいう『著作目録』のデータ 2,200 件という数字は、もちろん著書 2,200 冊という意味ではありません。1 件という単位は、書誌的記載事項、すなわち、標題、かかわりあいかた、著者名、所載刊行物名、刊行年月日、発行所名、所載ページの各項がすべて一致するものは同一著作物とし、一つでもちがっていれば、別の著作物としてかぞえています。

たとえば、「梅棹忠夫著作集」（全 22 巻 別巻 1）は、A5 判、別巻の『年譜・総索引』以外、すべて 600 ページをこえる大部のものが、1 冊まるまる「著者」としてかかっていますので、データとしては 1 巻で 1 件、23 巻で 23 件です。

いっぽう、梅棹が館長としてホストをつとめた広報誌『月刊みんばく』の「館長対談」は、新書判や四六判で 1 冊にまとめたときには、本 1 冊に関しては、「かかわりあいかた」は「編」、ひとつひとつの対談は、それぞれ標題も、お相手も、所載ページもちがうので、本 1 冊でも 10 件以上のデータが作成されるのです。

それでは、なにをもって「著作物」と認定するのか。それについては、梅棹本人が民博の研究連絡誌『民博通信』に書いております<sup>3</sup>。「著作物」とは、公表された刊行物であること、そして、その公刊物に対して自分に権利と責任があるもの。そうすると、著、編、対談、座談会から編集委員、監修まで「著作物」にふくみます。

還暦版の『著作目録』が発行されたのち、そのデータ 2,200 件すべてを 1980 年代はじめに民博のホスト・コンピューターに入力してもらいました。その後も、あらたな業績ができあがってくると、以前とおなじように、梅棹は現物を自宅に持ちかえり、手書きでカードをつくっておりました。いくら忙しくても疲れていても、その作業が高ぶった神経を穏やかにさせる一種のトランクライザーになっていたように思えます。B6 カードに万年筆で書かれた字は、整然としていて、みだれたところのないものでした。

梅棹は 1986 年に、中国でひいた風邪がもとで一夜にして視力を無く

<sup>3</sup>梅棹忠夫「館員刊行物一覧の意義と方法」『民博通信』第 2 号 pp.2-14 1978 年 6 月 国立民族学博物館〔「著作集」第 22 巻『研究と経営』 pp.443-460〕

## 第1部 本研究課題の成果報告

し、現在にいたっております。1986年の視力喪失後は私が書誌カードをつくり、それらを追加データとしてホスト・コンピューターに入力を依頼しました。

書誌カードは手元に2部のこし、1部は発行日順にならべ、もう1部は内容別にわけて、あらたな本づくりの構想をねる材料としました。

著作物1件ずつの整理番号は、発行日を基準にした数字をあてております。当初は6桁処理（西暦年の下2桁と月2桁に、2桁の通し番号）途中8桁（西暦年の下2桁に月2桁、日2桁に、2桁の通し番号）になり、2000年以降は10桁で処理をしております。発行年を西暦で4桁（yyyy）発行月2桁（mm）発行日2桁（dd）につづいて、同日内のおし番号、同じ掲載誌なら該当ページのわかいもの順、別の掲載誌なら発行間隔の短いものの順、日刊、週刊、隔週刊、月刊などの順に、01、02、03とふってゆくのです。

## データベースをつくる

しばらくして、大型コンピューターの時代からパーソナル・コンピューターの時代となり、マイクロソフト社の Access をつかって私がデータ入力するという作業をつづけていたのですが、どこかで仕切りをしたい。ならば、梅棹が満88歳になる2008年6月に冊子体の著作目録をつくらうということになり、目標を具体的に設定いたしました。

2007年の7月、梅棹資料室に総合研究大学院大学教授の及川昭文先生がふらりと立ちよられました。私どもが遠慮がちに著作目録の話をしたところ、「手つだってあげようか。人間文化研究機構の nihuONE をつかえば、あなたでもできるよ。データベースさえできれば、本にするのはかんたんだよ」とのお返事。ねがってもないお申し出です。とくに、「あなたでもできる」はおおいに気に入りました。nihuONE というのは、民博も所属している人間文化研究機構が研究資源を共有化しようとはじめた総合検索システムです。及川先生は客員教授として、その開発にたずさわっておられたのです。

事態は急展開し、そこからの手順について、及川先生は以下のようにまとめられました。

- ① まず、Access ではいつている既存の電子化データを元データとして nihuONE 上に仮のデータベースをつくる。
- ② 作成された仮のデータベースを分析し、項目定義をおこなう。
- ③ 項目定義と整合性がとれるよう、仮データベースのすべてのレコードを編集。
- ④ 電子化されていない新規データを項目定義にしたがい MS Excel で入力。
- ⑤ 仮データベースと追加のデータを元にして、データベースを更新。
- ⑥ すべてのレコードを SDF (Standard Data Format) 形式でプリント・アウト。
- ⑦ SDF 形式でプリント・アウトしたものを校正、データ修正、入力もれのデータ入力。
- ⑧ SDF 形式のデータを nihuONE にアップロードして最終的なデータベースを作る。
- ⑨ データベースの項目を編集して、印刷用データをつくる。

私どもの作業は、仮データベースの新規入力には Excel をつかい、いったんコンピューターの画面から離れて、登録順にデータが打ちだされたシートと著作物の現物を照合しながら、データの各項目を 1 件ずつ確認し、シートに訂正を赤ペンでいれました。データの訂正には、赤の入った A4 シート、約 4,400 枚を見ながらジャストシステム社の一太郎を使用しました。

当初、2,200 件をホスト・コンピューターに入れてもらってから、そこへの追加、そして Access と、この 30 年ちかくの経過中、じつに、いろいろなところで、間違いがおこるものです。間違いは「なるほど」と思えるものから、「えっ!」と思わず叫んでしまうものまでありますが、原因は機械ではなく、人がほとんどです。人というと、まるで他人事ですが、私自身の手作業のあやうさをしっかり自覚させられました。い

## 第 I 部 本研究課題の成果報告

まは、さきほど申しました 9 つの工程のうち、7~8 番目の工程（データ修正）で四苦八苦しております。

修正箇所をみつけるには、nihuONE の絞込検索や頻度統計などの機能を存分に使っております。頻度統計で項目を限定しますと、漢字の変換ミス、大文字、小文字、全角、半角の不統一などが、別ものとして出てくるのです。

データの件数は、還暦時の目録は 1940 年から 1978 年までの 39 年分で 2,200 だったのですが、あらたに中学時代の著作物が発見され、1934 年から 2007 年までの 74 年分、総数は 6,000 を超えました。件数の多さもさることながら、予想外の困難がつぎつぎと立ちはだかり、目標の 88 歳の誕生日は、またたく間に過ぎてしまいました。しかし、もうすぐ、89 歳になる本年 6 月までにはなんとか完成させられそうです。年も越してしまいましたので、収録内容を 2007 年の年末で区ぎらずに、2008 年いっぱいまで入れることにしました。そうすると、2008 年 12 月に中央公論新社から出版された米寿記念シンポジウムの記録、『梅棹忠夫に挑む』も入り、1934 年から 2008 年末までの 75 年分、ほぼ 6,360 件を収録することができます。

## リンク

もちろん、いま現在、人間文化研究機構の「研究資源共有化システム」のなかの、nihuONE にアクセスしていただければ、ほぼ完成した「梅棹目録」を利用していただけるのですが、まだ、問題があるのは、「リンク」と称している部分でしょう。

「リンク」は、ある著作物が、のちに転載されたり、一本の本に収録されたり、それが文庫になったり、のちに著作集に収録されたりといった展開のなかでの、直接の親子関係を明示するものです。「直接」という関係がポイントでして、親、子、孫となりますと、親と子、子と孫の関係しか記入しておりません。親と孫など二次以上の関係は、系譜をひとつずつたどっていくこととなります。



# 梅棹忠夫の著作物と著作目録（三原）

[Back](#) | [Home](#) | [DB\\_Sel](#) | [Search](#) | [Help](#) | [Logout](#) |

## 詳細表示

次のレコード

データベース名	UME03 梅棹目録_090106
<b>項目名称</b>	<b>入力内容</b>
ID	10001
文献番号	1934123201
種別コード	1
種別	
種別表示	著
言語	
タイトル	鷲峰山
サブタイトル	
著者名	梅棹忠夫
司会・聞き手	
掲載誌	京都府立京都第一中学校山岳部編『山城三十山記 上篇』
掲載誌属性	
シリーズ名など	部報
連載回	第3号
出版年	1934
出版年月日	1934.12
出版者	京都府立京都第一中学校山岳部
判型	
頁	pp.51-61
掲載箇所	
著作集収録巻	16
<a href="#">リンク元</a>	
リンク元との関係	
<a href="#">リンク先</a>	14741
リンク先との関係	収録
<a href="#">配信リンク元</a>	
<a href="#">配信リンク先</a>	
備考	
備考 No.	1
備考 リンク元	
備考 リンク元関係	
備考 リンク先	1992122001
備考 リンク先関係	収録
備考 No.不明	2771

次のレコード

一覧表示へ

梅棹忠夫著作目録データベース

レコード ID : 10001

## 第1部 本研究課題の成果報告

著作目録のデータベースから、2件のデータを例にとってみますと、レコードIDが10001というのは、梅棹の最初の著作物、中学3年生のときのもので、京都一山中岳部員として、京都山城にある30の山をえらんで、皆で手わけしてのぼり、その山岳誌を上下2冊本にしたものです。タイトルに「鷲峰山」とありますが、「じゅうぶせん」と読みます。レコードIDが14741は、「著作集」の第16巻『山と旅』で、それぞれのリンク元、リンク先を見ていただくと、レコードIDの10001は著作集に直接に収録されている、という関係がおわかりいただけるとと思います。

いま、おこなっている作業は、ほぼ6,400件にちかいデータのひとつひとつのリンクが正確かどうか、双方を照合するものです。このやっかいな作業も、及川先生から、リンク元、リンク先の関係が双方向でないものをエラーリストとして出していただいたおかげで、効率よくチェックすることができるようになりました。「切りくずしてゆけば、山は低くなる」、そう思って、日夜とりくんでおります。

梅棹は、つねづねこんなふうにもうしております。「学術情報は生産され、公有化されなければならない。そのためには、流通され、収集され、管理され、利用できなければならない」<sup>4</sup>。また、「われわれのような人生の生きかたをえらんだ人間にとっては、わが生存のあかしともいえるものは、著作をおいてほかは何ものもない」ともっております<sup>5</sup>。その自分自身を情報化する、それが著作目録であり、より便利な方法がコンピューターを駆使したデータベース化ではないかと、私は思っております。

私は自分で車を運転してあちこち出かけます。運転免許を取るときには、技能や法令だけでなく、自動車の構造のことも、いちおうおぼえたから試験に合格したのですが、いまは、構造のことなど意識することもなく車を運転して、具合がわるくなればディーラーに持ちこみます。「私はnihuONEで梅棹著作目録をつくっています」などと言ってはいても、及川先生にメールで相談したり、民博のnihuONE管

<sup>4</sup>梅棹忠夫「まえがき」『情報管理論』1990年1月 岩波書店〔「著作集」第22巻『研究と経営』 pp.269-271〕

<sup>5</sup>梅棹忠夫「著作目録をつくる」『梅棹忠夫著作目録』p.iv 1979年6月 中央公論社〔「著作集」第22巻『研究と経営』 pp.461-484〕



## 作業上で考えさせられたこと

ながくこの目録づくりに関わってきて、いろいろと考えさせられました。

まず、出版という世界には、あいまいな部分がひじょうに多い、ということです。たとえば、書名や出版社名ですら、カバー、表紙、扉、奥付とまったく同一か、と言え、そうではありません。そのほとんどが、内容の正確さでなく、デザインが優先されるのです。ですから、データをとる際には、いちばん情報量の多い、そしてデザイン性の高い「奥付」部分をつかいました。しかし、雑誌などで奥付のないのもありました。そんな出版世界でつくられた書誌データをつかった目録づくりは、ほんとうにたいへんです。

また、外国語への翻訳出版ですが、1970年ごろの台湾の例で、許可なく、日本語のまま、判型、中身もまったく同じ、新書名もそのまま、表紙の色だけかえて、奥付はゴム印でおしたのがありました。その後、1980年代半ばになっても、やはり台湾の例で、許可なく、中国語（繁体字）に翻訳されて出版されたのがありました。そのうち、中国の例ですが、だまって出版してから事後報告するようになり、出版の許可をもとめてはくるが、金銭的な支払いはなく、かろうじて現物支給のみ。それが、最近の韓国の例では、ちゃんと出版契約書を取りかわし、著作権や出版権の使用料について、しかるべき支払いがありました。

いろいろな例がありますが、翻訳された自著について、「著作物」とするか、否か。梅棹の書いたものは、英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、中国語、韓国語、ベトナム語、タイ語、エスペラント語などに翻訳されているのですが、すべての翻訳の出来ぐあいや内容の正確さなど、こちらには判定のしようがありません。しかし、思想は自分のもの、と解釈して、これも「著作物」に数えております。ただ、当事者から連絡をうけていないものは、自分の「著作物」とは認めておりません。

また、百科事典や地図の「監修」の場合、出版社から依頼をうけ、企画段階から関与して、刊行後は現物も手にした場合は「著作物」扱いをしておりますが、改訂や新シリーズなどで、勝手に再利用されてい

るときも「著作物」に登録しておりません。

## 「著作目録」印刷版

増補改訂版の著作目録は、近く、民博の出版物の「SER」(Senri Ethnological Reports)の一冊として公刊される予定です。体裁は、還暦版よりひとまわりおおきいB5判で、横2段組は変わりません。データの件数をもとに単純に見込み計算をしますと、あたらしい著作目録は、目録部分だけで500ページ前後になるかもしれません。

「SER」版の編者は梅棹忠夫、及川昭文、松原正毅で、第1部は「論文篇」、第2部は「目録篇」となっており、「論文篇」は、梅棹忠夫「著作目録をつくる」(再録) 梅棹忠夫「著作目録増補・改訂版」、松原正毅「幻視の行為者」、及川昭文「梅棹忠夫著作目録データベースをつくる」で構成されています。この「SER」は校費出版物として、各大学や研究所の図書館などに送付されていますので、これらの論文を読んでくだされば、「梅棹忠夫著作目録」について、よりふかく理解していただけたと思います。

梅棹の著作活動がさかんになった20世紀の半ばから21世紀初頭のいままで、情報処理の環境はおおきく変わりました。目録を作成する、という作業が、これほど様変わりするとは想像もしませんでした。じつに便利になったものです。このようなかたちで、著作目録を公開しますと、検索して、現物をみたい、内容をよみたいという申し出も当然おきてくるでしょう。それに対して、古い書籍、雑誌などは、手にとるだけで粉がこぼれおちるような状態ですので、うかつに書棚から取りだせません。いずれは、マイクロ・フィルムにおとすか、著作目録のデータベースの項目にpdf-filesを追加して、それをクリックすれば本文が読めるようにしたいと考えているのですが、著作物があまりにも大量にありますので、人手も費用も時間もかかります。梅棹の個人的な作業としてではなく、大きな支援が長期的に必要となると思います。

また、著作物のほかに、梅棹は「引紹批言」ファイルをもっております。それは、梅棹の書いた物などについて、引用、紹介、批評、言及されたものを、現物のコピーとともに、B6カードに書誌データと要

## 第 I 部 本研究課題の成果報告

旨を書きこみ、日づけ順に保管しているものです。著作物に連動して、これらもデータベース化したいものですが、手順は、このほどの「著作目録」に準じた作業になるでしょうから、これもすすめることができると思っております。

梅棹は、いまでも、週に1~2回、梅棹資料室に出てまいりますし、あたらしい著書もちかいうちに1冊できます。いつか、本人が著作活動を完全に停止しましても、転載や文庫化、ほかのかたの編著にはいる載録などで、著作物があたらしく生まれてゆきます。

梅棹忠夫著作物は、いまでも私物のままですが、いずれ民博に移管することになりましょう。それまで、あるいは、それからのちも、ということがあるかもしれませんが、資料室で著作目録の追加をおこないながら、フィールド・ノートのマイクロ・フィルム化の準備や「引紹批言録」などの資料の整理をすすめてゆくつもりです。

【質疑応答】

平田：資料を民博に移管することについてお聞きしたいのですけれども、昔はそうしたいのになかなかできなかった時期があり、民博はしなかったのですが、それをどういう事情でできるようにされたのですか？

三原：うごきだすきっかけのひとつには、おそらく民博の研究者の中に現職で亡くなられて、その方の資料類が民博にはいったこともあるのではないのでしょうか。本人が亡くなってしまい、著作物だけでなく、いろいろな資料がそのままの形でのこってしまった。ご遺族の方は、できれば、有効に使っていただきたいという希望があって寄贈されたのでしょう。資料といっても、形態はいろいろで、写真、録音テープ、メモや手紙もありますし、民族資料や、植物標本もあるでしょう。これらをどう扱ったらよいのか、これはアーカイブズだ、といったことで少し動きがでてきたのではないのでしょうか。

高岩：まず、私物であるということについて。これには非常に微妙なところがあると思われませんが、研究資料は私物であるのかあるいは所属していた研究機関が責任を持つものであるのかという点は、日本においてはとても曖昧であります。外国の例ですとかなりはっきり研究機関のものであると言われます。梅棹先生の件において私物であると強調されたことには、かなり個人的な性質の収集が多かったからだとは思いますが、それから、五十音順や年代順で梅棹先生の資料を整理されているとおっしゃっておられましたが、すべて既に整理をされたものからスタートされたそうですね。梅棹先生がそういったかたちで整理をされていたということではよろしいのでしょうか？

三原：そうです。私物であるということのを少々とく言いすぎました。そうお断りするの、あくまでも民博に対するエクスキューズなのです。これはみなさまもお気づきかと思うのですが、人文系では、自分の資料は自分のもの、人さまのものはその人のもの、と

## 第 I 部 本研究課題の成果報告

いった扱いをされることがおおいようです。資料を共有化したがないといったほうがよいのかもしれませんが。その中で梅棹は、もともと理科系の人間ですので、逆の公私混同、私のものを公に提供するつもりで、すべての資料を保管しております。それが大きな塊として資料室にあります。いつまでたってもそのままになる恐れもあります。しかし、亡くなられた方の資料寄贈をきっかけに、あるいはこのような会で、あくまでも私物であるということをお断りして、資料の内容や整理方法を紹介させていただくのも、ことが進む一種の外圧になるのではないかと考えております。整理方法については、五十音順なり年代順なりで、ひたすら配列するというのが、完全な梅棹方式です。内容分類はいたしません。中身を分類しますと、それぞれ極端な例、お茶を一杯飲む前と後では、判断基準がかわるかもしれません。ですから、見出しの五十音順、資料の年代順に並べる、ただそれだけで整理しております。「分類するな、配列せよ」です。その整理方法のおかげで、だれでも、かんたんに資料が取り出せる、もとにもどせる、とおもっております。